

回、その他の都市を合わせるとゆうに百回を越える第九の演奏が、プロ・アマチュアを問わぬ各地のオーケストラによって行なわれた。

ウィーンでもコンツェルトハウスで第九を楽しめるが、それにも増してのクライマックスは十二月三十一日に国立歌劇場およびフォルクスオパーにて催されるヨハン・シュトラウス「こうもり」の公演と、一月一日、ムジークフェライン金色の大ホールでのウィーンフィルによるニューイヤークンサートだろう。このニューイヤークンサートは衛生中継によって全世界に向けて放映されており、もちろん日本でも見る事ができる。

この国立歌劇場、フォルクスオパー、ムジークフェライン及びコンツェルトハウスでの催し物はいずれも十二月三十一日、一月一日と二回同じものが繰り返されるが、観光客も多く、切符の入手は早めに手配しないと難しい。特に一日のニューイヤークンサートのチケットを手に入れるのは、現地に住んでいてもまず無理、と思ったほうが早い。

多少趣向の変わったところでは、十二月二十四日の深夜十二時から教会で行なわれるクリスマス・ミサに行ってみるのも、ヨーロッパの伝統に触れる良い機会かも知れない。ただし聖シュテファン大寺院などは毎年大変な人出となるので、それなりの覚悟が必要である。

## 飲めや踊れや

一八一四年から一五年にかけて、ナポレオン戦争後のヨーロッパの国際秩序再建を目的とした国際会議がウィーンで開催された。列国の利害が複雑にからみあって会議そのものは一向に進展しなかったにもかかわ

らず、レセプションや舞踏会ばかりが催されたため「会議は踊る」などと陰口を叩かれたほど、ウィーンと舞踏会とは切っても切れない縁があるようだ。この様子は一九三一年に映画化されたが、御覧になった方もおられるだろう。

「舞踏会（バル）」というイヴェントは、今日でも変わらず人々に愛されつつオーストリアの歴史と生活の中に生き続けており、ウィーンでは毎年シーズン中に大小合わせて数百回の舞踏会が催されるという。いつでもどこでどんな舞踏会が催されるかはインフォメーションで手に入る「バルカレンダー」にくわしく記載されている。一九九〇年版のカレンダーには、ざっと数えてみたところウィーン市内四十九の会場での舞踏会二百六十一回が紹介されていた。

毎年十一月十一日午前十一時一分十一秒にファッション（謝肉祭）が始まるが、この興奮はクリスマスで頂点を迎える。その後春先のアッシャー・ミットヴォッホ（灰の水曜日。復活祭の六週間半前に始まる四旬節最初の日）、死について考え、改悛と懺悔をすると共に、これより精進期間が始まる）まではカトリックの生活リズムから見ておおっぴらに騒いでもよい時期で、したがって舞踏会は一月初めから二月末までの時期に集中的に開催される。

舞踏会にもいくつ種類があり、変わったコスチュームや覆面で変装して出かける「マスクンバル」、男女とも最高に着飾って出かけるエレガントなバル、その他きらびやかな宮殿やホテルなどに限らず、家庭で親しい友人同志と子供も交えて楽しむ「ファッシング・パーティー」等々、そのファンタジーは止どまるどころを知らない。

ウィーンならではのとびきりハイクラスの舞踏会は、国立歌劇場で行われ毎年テレビのニュースにもなる「オペルンバル」と、ミュージックフェラインで行われ、オーブニングにはウィーンフィルのメンバーも演奏する「フィルハーモニカーバル」などだろう。このような格調高い舞踏会は、夜も十時にならないと始まらない

い。オーブニングでは名目上「社交界にデビューする」若者がフロアー狭しとばかりにワルツを披露するが、その際女性は純白のイブニングドレス、男性は燕尾服に身をかため、華やかなセレモニーとなる。

オーストリアが共和国となって貴族社会が消滅し、いわゆる社交界の輪郭があやふやになってしまった今日では、以前このオーブニング出場のために必要だったような厳しい条件はすでに存在しない。舞踏会の主催者や関係者の子供達がデビュタント・デビュタインとして出場する以外に頭数を揃えるため、一般から出場希望者を募ることが少なくない。ただしハイクラスのバルになればなる程出場希望者も多く、公平を期するためにオーディションが行われる。デビューに適した年齢も必要条件だが、第一にワルツが上手に、それも普通の右回りだけでなく、より難しい左回りのステップとも巧みにこなせるようになってはパスできない。

オーブニングのあとは、自由に飲んだり踊ったり軽食をつまんだりしながら知人と談笑を楽しむが、時のたつのを忘れて明け方四時、五時頃まで会場にいることもザラである。踊りは特にソーシャルダンスやワルツばかりでなく、ディスコもある。大きな会場ではダンスのフロアーがいくつも用意されており、自分の好みの音楽を選ぶことができるようになっていく。かなり高価な賞品が当たる籤引きがあったり、ルーレットも楽しめたり等々、とにかく普段の生活の苦勞を忘れて別世界に遊べるような仕組みになっている。

この体力的にもかなりのものを要求される享楽（徹夜をしても、週末でない限り普通の人は翌日また働かなくてはならない……）のお値段はそれこそ千差万別だが、安いもので入場料が二千〜五千円前後、前述の本格的な舞踏会では一万〜二万五千円ぐらいである。それに加えて夜を徹しての立ちづくめ・踊りづくめに耐える自信のない人は、飲食や談笑にも使える椅子席を予約するわけだが、これ一席あたりさらに最低数千円支払わなくてはならない。聞くとところによるとオペルンバルだけは別格で、ボックス席のテーブルひとつをまるまる予約すると（数人しか座れない小さなテーブルである）席によっては百五十万円（一九九〇年現在）

かかるそうだ。食べ物、飲み物その他はもちろん別会計での話である。

オペルンバルでは特別に最上階のギャレリーのみ物見高い観客用に解放されている。解放される、とはいっても観覧入場料はとられる。禁食・禁飲・禁舞踏ながら、ハイソサエティーの雰囲気、眼下に眺めて喧騒を耳にし、その人いぎれの匂い、匂ぐことぐらいは可能である。

舞踏会を楽しむためにかかるお金は、なにも入場券と飲食費のみではない。イブニングドレスの調達に始まり、美容院代などもバカにはならない。ドレスを買えば靴が合わぬ、靴が合えば今度はハンドバッグの色と揃わない、と、限りなく騒がしいのは世界の女性の共通項のようだが、男性はスモーキングか燕尾服一着で間に合うので安上がりだ。貸衣裳屋もあるが、シーズン中にちょっと大きめの洋服専門店に行くところのよいうな男性用礼服が揃うのでズラッとぶらさがっており、日本で買うよりずっと安いし、サイズやデザインも豊富である。もしまだならおひとつ如何ですか？

## ダンスを習おう！

そもそも音楽の起源はどこに求めるべきか？などと難しい事は、あまり考えないほうが身のためである。際限のない問題だし、音楽と一口にいつてもそれこそ千差万別な種類がある。たとえある程度手応えのある知識を得たとしても、それが日常の「音楽の楽しみ」の助けにはなるだろうか？？

それよりは音楽を「宗教音楽」と「世俗音楽」とに区分けしてみる方がわかりやすく、我々が普段から馴れ親しんでいる西洋音楽との接点が多い。

キリスト教の持つ空前絶後のエネルギーとともに発達したヨーロッパの宗教音楽は、人類の貴重な財産の